

誌上行学講習会

高佐日焯上人

次に考える段階に入ります。考えると云い
すがこの場合間違つてならないことは、決して主
我が考えているのではないということ。あくまで
も考えるのは心、即ち意識が考えるのです。心
意識の中にものを考える装置があり、それにう
たえますと心が自動的に考えてくれるわけなん
あります。つまりそこに思惟（しゆい）が生まれ
るのです。そして思惟には三通りあります。（一）観
察、（二）判断、（三）構想で、更に（四）の觀察にも、もの
を分析して見る（分析）。まとめてみる（綜合）。
欠けたところを道理で置きなつてみる（推量）の
三つの立場があります。よく「あいつは頭の悪い
やつだ。あのくらしいことがどうして解らないん
のだ」という声を聞きますが、それは頭の中の機械
の出来が悪い、いわばさびついで、それは頭の機
なくなつている状態のことです。ですから考えようと
思うところまで主我は一生懸命に努力するので
が実際に考える心（脳味噌）が働かないのであり
ます。例を自動車に取つてみます。運転手が主我
で自動車が心になります。いくら運転手（主我）
が立派で名人であつても、自動車（心）がおんぼ
ろでさびついていたんでは何の役にも立たない。
運転手（主我）はどの自動車（心）でも乗れるわ
けですが、自動車の出来の善悪で賢愚負勝が決ま
つてしまうのであります。（以下次号）

お題目で成仏するV

釈尊の解脱は、肉体我からの解放であつた
がそれは、妙法という真我への回帰でもある。
真我に回帰した自己は、宇宙に偏在する意識と
一体になり、いわゆる宇宙即我の境地に達する。
幾千もの生涯を釋尊は思い出す。あるときは王
として万民を統治し、あるときは聖者となり人
々に道を説いた。あるときは家族に恵まれ幸せ
な生涯を送つた。ロマンの花も数々咲かせた人
々を救うため幾度も自分の命を捨てた。
この前世想起は、それに止まらず、宇宙の成
立と破壊のサイクルをも想起した。また人々の
無限の輪廻転生の相も自分のことのようにあり
ありと想起された。そして、宇宙は全ての存在
と生命がお互いに支え合ひ補ひ合ひ生きている
ひとつの生命体であることを知つた。
釋尊は、その瞑想の深層の中で大宇宙の創造
の意志を悟つた。なぜ宇宙は自らを創造し万象
万物をそこに存在せしめたのか。いわば本仏の
本願を悟られたのである。
釋尊は、自らの解脱体験の難しさを鑑み人々
にその道を説くことを断念する、しかしその
時梵天が現れ、「ゴータマ・シッタールタよ人々の
中には転生の過程で汝と縁のある者もすくなく
い。解脱の道をよく理解する者もあろう。その道
を説きなさい」と勧めた。ここに釋尊の人類解放
の運動が始まる。この釋尊の尊い悟りとお志を想
い私たちが生命の究極の目的を考えるべきである。